2024年1月7日　二十歳の感謝の時

説教題「キリストの名によって」使徒言行録３章１～１０節

主任牧師　加藤　誠

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（使徒言行録3章6節）

「二十歳の感謝の時」を覚えて礼拝に来てくれた若者たち、よく教会に来てくれました。先日新聞を広げていると「AI がまるで人間が書いたような整った文章を一瞬で生み出す時代だからこそ、子どもたちには『自分のアタマで考える学び』を大切にしてほしい」という言葉が飛び込んできました。文章も写真もビデオも AI だらけの時代をこれから生きていく若者たちに「自分の心で感じ、自分の頭で考えることを大切にしていってほしい」と伝えたいと思います。

同じ新聞紙上に 13 歳の中学生の女の子がこんな文章を寄せていました。「わたしには妹がいます。ダウン症です。周りの子どもが妹のことを『他の人と違って変だよね』と話しているのを時々耳にします。妹ができてからダウン症だけでなく、いろんなハンディを背負ってる人は、思った以上にたくさんいることに気がつきました。その中には、ささいなことでも傷ついてしまう人もいるのです。なので私は人をたくさんほめる人が増えて欲しいです。思ってもないことをほめるのではなく、真正面から向き合ったときに、すごいなと思ったことを伝えられる自分になっていきたいです。」

最後の「真正面から向き合ったときに、すごいなと思ったことを伝えられる自分に」の部分が心に刺さりました。その人のことを口先でほめるのではなく、真正面から向き合って、自分の心で感じ自分の頭で考えることを大切にして初めて出来ることです。

そのために聖書のイエス・キリストとつながってほしいと心から思います。なぜならイエスという方は、自分の心で感じ自分の頭で考えることを大切にされた方だからです。主イエスは当時「これが正しい」と社会全体で教えられていたことに「それってほんとうかな？」と疑問符をぶつけられた方でした。「あんな連中と付き合うな。ケガレる！」と、重い病気の人、障害を持った人、いかがわしい仕事をしている人、外国人と付き合うことをみんなが敬遠していた時代に、主イエスは一人だけ「神さまはどんな人も愛されているはずではないか？そういう人たちがほんとうにケガレている人だろうか？」と、どのような人とも隔てなく自由に付き合い、食事を一緒にされました。人びとの言葉に惑わされることなく、一人ひとりと真正面から向き合い、良いことは良いと言われたのです。例えばローマの兵隊に「このような信仰はイスラエルの中でも見たことがない！」とほめられました。

主イエスは、百匹の羊の一匹が迷子になった時、神はその一匹を探される方だという譬え話をされましたが、それは 99 人が「あいつとは付き合うな」と言っても主イエ

スだけは「大丈夫！あなたも大切な神の子だ！」と語っていったということでしょう。

そのように社会の中でたった一人、人々とは違うことを語り行動したイエスを人々が「あいつは悪霊の頭だ！」と糾弾した時、主イエスは「人の子はどんな罪も赦される。しかし聖霊を冒涜するものは赦されない」と言われました。聖霊は神の自由な働きのこと。「神の自由な働きを冒涜し、邪魔してはいけない。それだけは赦されない」。つまり、人間が自分はどんなに正しいと思っても、それを絶対視して自分を神にし、他人を糾弾して、神の自由な働きを邪魔することがないように…と教えられたのです。自分の意見を大切に持つということは、自分とは違う意見の人のことも大切にし、その対話の中で、一緒に神さまの御旨を尋ねていくように私たちは招かれているのです。

使徒言行録 3 章にはペトロとヨハネと生まれつき足の悪い人との出会いが記されています。神殿の「美しの門」の前で参拝者たちに施しを乞うて生きていた男。多くの人たちは見て見ぬふりをして、「関わらないでおこう」とその前を通り過ぎて行ったことでしょう。中には「可愛そうに」と施しを恵んでくれる人がいても、この男に真正面から語りかける人はいなかった。けれどもペトロとヨハネは、真正面からこの男に語りかけていきました。それは二人がずっと主イエスを見てきたからだと思います。もしかすると二人はドキドキしながらだったかもしれません。けれども主イエスがそうされてきたのを見てきたから、その主イエスの力に背中を押されて真正面からこの男に語りかけることができたのだと思うのです。

この男はお金がもらえるのかなと期待しましたが、違いました。ペトロとヨハネは、「金銀はないが、わたしにあるものをあげよう」と語りかけたのです。「わたしにあるもの」。「わたしたちが生かされてきた力」を紹介しようということでしょう。実際にペトロとヨハネを生かしてきたもの。それはイエス・キリストの力でした。どんな場面、どんな状況にある時も、自分たちを神の愛につなげて、神の愛と正しさと勇気につなげてきてくれたイエス・キリストの力を「ぜひあなたにも受け取ってもらいたい！」と、彼らが真正面からこの男と向かい合い紹介した時に、この男はイエス・キリストの名で立ち上がり歩き始めたのです。

「イエス・キリストの名で立ち上がり、歩く」。実はこの言葉は私にとって忘れられない言葉です。今から 29 年前の阪神淡路大震災の時に、当時牧師をしていた神戸教会が地域の避難所となり約二か月間半を過ごした時、大変な混乱の中で、イエス・キリストの言葉が私の矢印となり支えとなり勇気となりました。あの大変な困難の中に、大切なことをたくさん学ぶことが許されたのは、この御言葉のおかげでした。

二十歳を迎える一人ひとりにも、ペトロとヨハネが真正面から向き合い、紹介している言葉を受け取っていってほしいと願います。イエス・キリストが注いでくれる力が、皆さんのこれからの人生を切り拓く力となっていくことを信じ、祈ります。